

アウヴァイヤール作『アーッティ・スーディ』

——ヴェーンカタサーミ・ナーッタール註の和訳と解説——*

(二)

山下博司

VI. 『アーッティ・スーディ』本文と註 (Ātticūṭi, Mūlamum Uraiyaum)

(続き)

61. Tēcattō ṭottuvāl. (tēcattōṭu ottu vāl)

土地に合わせて暮らすべし。

【語釈】 tēcattōṭu……汝が住まう土地にいる人々と。ottu……（敵対なく）合わせて
[＝順応して]。vāl……暮らすべし。

【趣意】 汝が住まう土地の人々と対立なく馴染んで暮らしなさい。

62. Taiyalcor kēḷēl. (taiyal col kēḷēl)

女人の言を聞くなかれ。

【語釈】 taiyal……（汝の）妻の。col……言葉を。kēḷēl……聞いて行動するなかれ。

【趣意】 妻の言葉を聞いて行動してはならない。

63. Tonmai maravēl.

古きを忘るるなかれ。

【語釈】 tonmai……古き友情を。maravēl……忘れ去るなかれ。

【趣意】古き友情を忘れ去ってはならない。

【訳注】Krishnaswami (p.7) は、“tonmai”を「伝統 (traditions)」とする。
Irākavaiyankār (p.81f.) は、「古い友人たちに落ち度・欠点があるからと
いって、長年の友誼を損なってはならない」の趣意を見出す。

64. Tōrpaṇa toṭarēl.

敗るるを求むるなかれ。

【語釈】tōrpaṇa……負けることがあり得るもめごとに。toṭarēl……関わるなかれ。

【趣意】負けることがあり得ることどもに首を突っ込んでではない。

65. Naṇmai kṭaippiṭi.

良きことを固守すべし。

【語釈】naṇmai……良きこと [=善を為すこと] をこそ。kṭaippiṭi……固く心にと
めるべし。

【趣意】善行を為すことを固く心にとめなさい。

66. Nāṭop paṇacey. (nāṭu oppana cey)

土地が和するを為すべし。

【語釈】nāṭu……汝の土地にいる人々の多くが。oppaṇa……賛同するに相応しい良
きことどもを。cey……願わくは為すべし。

【趣意】(その) 土地にいる人々が賛同するに相応しい良きことどもを為しなさい。

67. Nilaiyir piriyeḷ. (nilaiyil piriyeḷ)

位から離るるなかれ。

【語釈】nilaiyil……(汝が立つ高い) 状態から。piriyeḷ……(片時も) 離れるなか
れ。

【趣意】汝の良き状態から落ちてしまってはならない。

68. Nirvīlai yāṭēl. (nīr vīlaiyāṭēl)

水で遊ぶなかれ。

【語釈】 nīr……（深さのある）水〔場〕で。vīlaiyāṭēl……（泳いで）遊ぶなかれ。

【趣意】（増水した水場〔または早瀬〕で）泳いで遊んではならない。

〔訳注〕 Irākavaiyaṅkār (p. 85) では、“nīr” を文字どおり「水」とはとらず、“nīrmai”（性質）と解し、「他人の近づき易い、気安い性質をいいことに、それにつけ込み弄ぶことなかれ」のごとき意味とする。

69. Nuṅmai nukarēl.

美食を摂るなかれ。

【語釈】 nuṅmai……（病を起こす）軽食類を。nukarēl……食すなかれ。

【趣意】 病を起こす美食を食してはならない。

〔訳注〕 Irākavaiyaṅkār (p. 85f.) は、“nukarēl” の代わりに “nuvalēl”（言うなかれ）の読みを採り、それに応じて “nuṅmai” についても「神秘」「極致」の意に解して、この詩句を、「宗教上の秘密・極意をみだりに他人に明かしてはならない」の意味と解する。

70. Nūlpala kal. (nūl pala kal)

多くの書を修むるべし。

【語釈】 nūl pala……（知恵を育む）多くの書を。kal……修得すべし。

【趣意】 知恵を育む多くの書物を修得しなさい。

71. Nerpayir vīlai.

稲を培うべし。

【語釈】 nerpayir……稲を。vīlai……（必要な努力を為して）培うべし。

【趣意】 稲を一所懸命培いなさい。

【補註】 耕し食べて生きることこそ崇高 [な生き方] である。

72. Nērpaṭa voḷuku. (nērpaṭa oḷuku)

真っ直ぐに振る舞うべし。

【語釈】 nērpaṭa…… (汝の行いが曲がらず) 正しく。oḷuku……振る舞うべし。

【趣意】 道を踏み外さず、真っ直ぐな道を歩み [=振る舞い] なさい。

73. Naiviṇai naṇukēl. (nai viṇai naṇukēl)

悪しき行いに近づくなかれ。

【語釈】 nai…… (他の人々が) 損なわれるような。viṇai……悪事に。naṇukēl……
(片時も) 近づくなかれ。

【趣意】 他の人々が迷惑を被るような悪い行いを為してはならない。

74. Noyya vuraiyēl. (noyya uraiyēl)

卑しく言うなかれ。

【語釈】 noyya…… (無益な) 卑しき言葉を。uraiyēl……述べるなかれ。

【趣意】 無用な卑しい言葉を語ってはならない。

[訳注] Winslow (p.701) では「(他人を) 侮蔑する言葉を吐くなかれ」のごとく
解する。“noyya” の解釈次第で、さまざまな意味になり得る。

75. Nōykkiṭaṇ koṭēl. (nōykku iṭam koṭēl)

病に所を与うるなかれ。

【語釈】 nōykku……諸々の病気に。iṭamkoṭēl……場所 [隙] を与えるなかれ。

【趣意】 食物、睡眠をはじめとしたことによって、病気に場所 [隙] を与えてはならない。

[訳注] 不適当な食生活や不適切な睡眠がもとで、病気を招き寄せることなかれ、の
意と思われる。

76. Paḷippaṇa pakarēl.

侮るを口にするなかれ。

【語釈】 paḷippaṇa……（知恵ある人々によって）侮蔑されるような卑しい言葉を。
pakarēl……語るなかれ。

【趣意】 長上たちによって侮蔑される言葉を語ってはならない。

【補註】 侮蔑される言葉とは、虚言、中傷、痛烈な言葉、無駄口といったもの、及び卑猥な言葉とである。

【訳注】 Irākavaiyaṅkār (p. 89) は、この詩句を、「人が別の人を侮蔑していることを、汝は告げ口するなかれ」のごとく解する。

77. Pāmpoṭu paḷakēl.

蛇と親しむなかれ。

【語釈】 pāmpoṭu……（ミルクを与えた人にも毒を与える）蛇のような者たちとは。
paḷakēl……接するなかれ。

【趣意】 蛇のような残忍な者たちと接してはならない。

【訳注】 Irākavaiyaṅkār (p. 89) は、「蛇」を「身体が冷たく [=いかにも快く] 見せつつも、口に毒をもつもの」と規定し、そのような者と付き合ってはならないと説明している。

78. Pilaipaṭaṭ collēl. (pilaipaṭa collēl)

過ちが生ずべく語るなかれ。

【語釈】 pilaipaṭa……間違いが生ずるように。collēl……何事も語るなかれ。

【趣意】 過失が生まれるように語ってはならない。

【訳注】 所謂「口は災いのもと」の意と思われる。

79. Piṭu peranil. (piṭu pera nil)

栄達を得べくあるべし。

【語釈】 piṭu……栄誉を。pera……得るように。nil……（良き道に）あるべし [=とどまるべし]。

【趣意】 栄誉を勝ち得るよう、良き道にありなさい [=とどまりなさい]。

【訳注】 Irākavaiyaṅkāra 本 (p.90) は、詩節を “Piṭupera nil.” と区切る。

80. Pukaḷuntāraip pōrriṅvāl. (pukaḷuntārai pōrri vāl)

讃える者を護り生くるべし。

【語釈】 pukaḷuntārai……汝を讃え付き添える人々を。pōrri……（離さず）守護し。vāl……生きるべし。

【趣意】 付き添える人々を支えて生きなさい。

【訳注】 Irākavaiyaṅkāra 本 (p.91) は、“Pukaḷpaṭa vāl.” の読みを採り、「さらに誉れが増すべく生きよ」の意味とする。

81. Pūmi tiruttiyuṅ. (pūmi tirutti uṅ)

土地を正して食すべし。

【語釈】 pūmi……（汝の）農地を。tirutti……耕して作物を培い。uṅ……食べるべし。

【趣意】 土地を耕し作物を培って、食べなさい [=生活しなさい]。

【訳注】 Irākavaiyaṅkāra 本 (p.91) は、“Pūmi virumpu.” 「大地を愛せ」の読みを採る。

82. Periyārait tuṅaiṅkoḷ. (periyārai tuṅai koḷ)

長上を伴侶と為すべし。

【語釈】 periyārai……（知恵に優れる）長上たちを。tuṅaiṅkoḷ……汝にとっての伴侶として敬うべし。

【趣意】 長上たちを伴侶として求めなさい。

83. Pētaimai yakarru. (pētaimai akarru)

愚昧を除くべし。

【語釈】 pētaimai……無知を。akarru……追い払うべし。

【趣意】 無知を除き去りなさい。

84. Paiyalō ṭiṇānkēl. (paiyalōṭu iṇānkēl)

童子と親しむなかれ。

【語釈】 paiyalōṭu……小さな子供と。iṇānkēl……接するなかれ。

【趣意】 知恵のない少年と一緒に徘徊してはならない。

[訳注] Krishnaswami (p. 11) は, “paiyal” のもつ「卑俗な者たち」の意を採る。

Irākavaiyaṅkāra 本 (p. 93) は, “paiyalō” の代わりに “paitalō” の読みを採る。語義は同じである。

85. Poruṭānai pōrrivāl. (poruṭānai pōrri vāl)

財を護りて生きるべし。

【語釈】 poruṭānai……財物を。pōrri……(ますます増えるべく) 大切に。vāl……生きるべし。

【趣意】 財を浪費せず, 大事に守って生きなさい。

[訳注] “-tan” は名詞につく助辞 (acaicol, poetic expletive)。

86. Pōrttolil puriyēl. (pōr tolil puriyēl)

争いごとを為すなかれ。

【語釈】 pōr……諍いになるような。tolil……行為を。puriyēl……為すなかれ。

【趣意】 誰とも諍いを起こしてはならない。

87. Maṇantaṭu mārēl. (maṇam taṭumārēl)

心乱るるなかれ。

【語釈】 maṇam……心。taṭumārēl……乱れるなかれ。

【趣意】 何によっても心の乱れを起こしてはならない。

88. Mārāṇuk kiṭaṅkoṭēl. (mārāṇukku iṭam koṭēl)

敵に所を与うるなかれ。

【語釈】 mārāṇukku……敵に。iṭam koṭēl……場所〔隙〕を与えるなかれ。

【趣意】 敵が汝を苦しめるような場所〔隙〕を与えてはならない。

〔訳注〕 Irākavaiyaṅkār (p.96) は、詩句の意味を即物的にとり、「敵王に、自分の国の一部たりとも与えてはならない」と解する。

89. Mīkaipaṭaṭ collēl. (mīkaipaṭa collēl)

過ぐるほど語るなかれ。

【語釈】 mīkaipaṭa……言葉が過ぎるほどに。collēl……語るなかれ。

【趣意】 言葉を、度を過ぎて語ってはならない。

〔訳注〕 Irākavaiyaṅkār (p.96) は、「他の王に、自分のほうが勇猛心に勝っているなどと言ってはならない。徒に敵愾心を煽るばかりであるから」のごとくに解する。

90. Mītuṅ viruṅpēl. (mītu ṅ viruṅpēl)

大食を好むなかれ。

【語釈】 mītu ṅ……度を過ぎて食べることを。viruṅpēl……欲するなかれ。

【趣意】 甚だしく食べ物を食べることを欲してはならない。

91. Muṅaimukattu nillēl.

戦陣にあるなかれ。

【語釈】 muṅaimukattu……戦争の場に。nillēl……（赴いて）居るなかれ。

【趣意】 戦陣に居てはならない。

[訳注] 注釈家によっては、動詞“nil”を「(何もせずにただ)立っている」と解し、「戦場で漫然としていてはならない」のごとき意を汲み取っているものも見える (Krishnaswami, p.11 など)。

Irākavaiyaṅkār (p.98) は、「一族や友人が相争う戦場で、汝は一方に立つことなく振る舞え」の意に解する。

92. Mūrkkarō ṭiṅṅkēl. (mūrkkarōṭu iṅṅkēl)

頑迷なる者と親しむなかれ。

【語釈】 mūrkkarōṭu……頑迷な性質がある者たちと。iṅṅkēl……親しむなかれ。

【趣意】 頑迷な性質がある者たちと一緒に親交を結んではならない。

[訳注] Irākavaiyaṅkār (p.98) は、“mūrkkar”を「自分のもつ悪い徳・性質を、悪いと知りつつも未だに棄てることのない愚か者」のこととする。

93. Mellinallāḷ tōḷcēr. (mel il nallāḷ tōḷ cēr)

柔き妻なる女の肩を合わすべし。

【語釈】 mel……たおやかな。il……(汝の)妻たるところの。nallāḷ……女の。tōḷ……両肩を。cēr……合わすべし。

【趣意】 他の女性を欲することなく、汝の妻と共に暮らさない。

【脚註】 “melliya tōḷ cēr”という読みも存する。

[訳注] 脚註で紹介された読みを採るならば、「女の肩と合わせよ」(melliyaḷ tōḷ cēr) という意味になるであろう。「肩を合わせる」は、男女の仲睦ましい関係、特に性的な交わりを暗示する表現。

94. Mēṅmakkaḷ coṅkēḷ. (mēṅmakkaḷ col kēḷ)

大いなる者の言を聞くべし。

【語釈】 mēṅmakkaḷ……崇高なる人々の。col……言葉を。kēḷ……聞いて行動すべし。

【趣意】 良き行いをもてる長上たちの言葉を聞いて行動しなさい。

【訳注】 Irākavaiyaṅkār (p.101) は, “mēnmakkaḥ” を「高い生まれの者たち」ととる。

95. Maivīlyār maṇaiyakal. (maivīlyār maṇai akal)

マイの目をもつ女の家を離るるべし。

【語釈】 maivīlyār……マイ [=アイシャドウ] を引いた両目をもてる遊女たちの。 maṇai……家を。 akal…… (片時も近寄らず) 遠ざかるべし。

【趣意】 遊女たちの家と接することなく、避けなさい。

96. Moliṅva taramoli. (molivatu ara moli)

言うことを収まるべく言うべし。

【語釈】 molivatu……述べられる事を。 ara…… (疑念が) 収まるべく。 moli……述べるべし。

【趣意】 述べることを、疑念なく正しさがあるように、述べなさい。

【訳注】 「(聞く者に) 疑問が生じないよう、明瞭に述べよ」の意と思われる。本によっては, “aramoli” を “aram+moli” の複合語ととり, 名詞文と解する。それに従えば, この一文は「語るは正義の言葉たるべし」というほどの意となる。この解釈を採用した例に, Irākavaiyaṅkār 本 (p.101) がある。

97. Mōkattai muṇi.

欲を厭うべし。

【語釈】 mōkattai……欲望を。 muṇi……嫌悪して斥けるべし。

【趣意】 常住ならざるものに対する欲望を厭離しなさい。

【訳注】 Irākavaiyaṅkār (p.101) では, “mōkam” を「汝の身体と物に対する執著」とする。

98. Vallamai pēcēl.

力能を語るなかれ。

【語釈】 vallamai……（汝の）能力を。pēcēl……（誇って）語るなかれ。

【趣意】 汝の能力を汝自らが誇って語ってはならない。

99. Vātumuṛ kūrēl. (vātu muṇ kūrēl)

口論を前で述べるなかれ。

【語釈】 vātu……口論を。muṇ……（長上たちの）前で。kūrēl……語るなかれ。

【趣意】 長上たちのもとに出て行って口論してはならない。

【訳注】 本文が簡潔に過ぎ、諸本の間で解釈に齟齬が生じている。Vēṅkaṭacāmi Nāṭṭār のように、賢者の眼前で議論することへの戒めとする例のほか、注釈家によっては、むしろ逆に「愚者の前で口論するなかれ」の意を汲み取る者もある。

100. Vittai virumpu.

学を好むべし。

【語釈】 vittai……学修なる財産を。virumpu……欲すべし。

【趣意】 学修という良い財産を好みなさい。

【訳注】 Irākavaiyaṅkār (p.103) は、“vittai” (<Skt.vidyā-) の語をバラモンのな文脈から解し、“brahma-vidyā” (ブラフマンに関する知識) を指すものとする。

101. Viṭu peranil. (viṭu pera nil)

解脱を得べくあるべし。

【語釈】 viṭu……解脱 [ないし天界] を。pera……得るべく。nil……（それに相応しい智慧の道に）あるべし。

【趣意】 解脱 [ないし天界] を得るように正しい道にありなさい。

〔訳注〕「解脱（天界）を得るのに相応しい生き方をせよ」の含意。Irākavaiyaṅkāra (p.103) は、“Viṭupera nil.” と区切る。

タミル語 “viṭu” (本文), “mōṭcam” (語釈), “mutti” (趣意) は、いずれもサンスクリット “mōkṣa-” ないし “mukti-” と対応するか、それらの概念を予想させる語であるが、タミルの宗教においては、これらの語が事実上「天界」を表すことも多く、無造作に「解脱」と訳した場合、誤解が生じ兼ねないことに注意されたい。

ただし、Irākavaiyaṅkāra (p.103) は、パラモンの立場から、「解脱を得るために、知識の道 (ñāna-mārkkam) に立て」との解釈を示す。

102. Uttama nāyiru. (uttamaṅāy iru)

^{たいじん}
大人としてあるべし。

【語釈】uttamaṅāy……高い徳をもてる者となって。iru……暮らしてあるべし。

【趣意】良い徳において秀でた者となって生きなさい。

〔訳注〕この詩句は“u”の字ではじまるが、“vu”の字ではじまるものとして扱われている。Irākavaiyaṅkāra 本 (p.104) では、“Uttamaṅā yiru.” と区切る。同書は、“uttamaṅ”たる目的を、解脱を得るためと解する。

103. Ūruṭaṅ kūṭivāḷ. (ūruṭaṅ kūṭi vāḷ)

土地の人と共に生きよ。

【語釈】ūruṭaṅ……土地の人々とこそ。kūṭi……(幸につけ不幸につけ)睦まじく。vāḷ……暮らすべし。

【趣意】土地の人々と、幸につけ不幸につけ仲良く暮らさない。

〔訳注〕この詩句は“ū”の字ではじまるが、“vū”の字ではじまるものとして扱われている。Irākavaiyaṅkāra (p.104) は、先行する101番や102番と同様、この句についても、「解脱」の文脈から説き、それを得る環境・条件を述べたものと解する。

104. Veṭṭenap pēcēl. (veṭṭu eṇa pēcēl)

斬るごとく語るなかれ。

【語釈】 veṭṭu eṇa……刀で斬るごとく。pēcēl……（誰とも痛烈に）語るなかれ。

【趣意】 誰とも、刀で斬るように痛烈に語ってはならない。

105. Vēṅṭi vīnaiceyēl. (vēṅṭi vīnai ceyēl)

望んで行為を為すなかれ。

【語釈】 vēṅṭi……好んで。vīnai……悪しき行ないを。ceyēl……為すなかれ。

【趣意】 故意に悪事を為してはならない。

【訳注】 Irākavaiyaṅkār (p.105) では、本文で (“ceyēl” の代わりに) “ceyal” を掲げる（誤植か？）。

本によっては、「返報を期待して行為を為すなかれ」と解する (Irākavaiyaṅkār, p.105f. など)。“vēṅṭi” (動詞 “vēṅṭu” の verbal participle 形) の取り方次第で解釈に違いが生じている。

106. Vaikarait tuyilelu. (vaikarai tuyil elu)

夜明けに眠りから起きるべし。

【語釈】 vaikarai……明け方には。tuyil……睡眠をやめ。elu……起きるべし。

【趣意】 毎日太陽が昇る以前に、睡眠を終えて起床しなさい。

【訳注】 Irākavaiyaṅkār (p.106) では、“tuyilelu” の代わりに “toluteļu” の読みを採り、「明け方、起床に際しては神を拜むべし」と解する。

107. Onṅārait tērēl. (onnārai tērēl)

敵を信ずるなかれ。

【語釈】 onṅārai……敵たちを。tērēl……信じるなかれ。

【趣意】 敵たちを信用してはならない。

【補註】 “Onṅāraic cērēl” という読みもある。

〔訳注〕この詩句は“o”の字ではじまるが、“vo”の字ではじまるものとして扱われている。

上の補註において例示された読みを採れば、「敵たちと結ぶなかれ」の意となる。この読みを採用する本も多い。Irākavaiyaṅkāra 本 (p.106) は“tērēl”の読みを採る(103番と対を為すと解することくである)。

Irākavaiyaṅkāra (p.106f.) では、遁世 (sannyāsa) に害を為す者どもに随順するなかれ」のごとき意味にとる。

108. Ōraṅ collēl. (ōram collēl)

^{ひいき}
最良を語るなかれ。

【語釈】ōram……依怙最良〔の言〕を。collēl……(いかなる議論においても)語るなかれ。

【趣意】いかなる議論においても、一方の肩をもって語らず、中立の立場で述べなさい。

〔訳注〕この詩句は“o”の字ではじまるが、“vō”の字ではじまるものとして扱われている。

Irākavaiyaṅkāra (p.107) は、“ōrntu valipō”の読みを採り、「真実を知って解脱の道を行け」の意に解する。

『アーッティ・スーディ』本文と註

完結せり

アウヴァイヤール作『アーッティ・スーディ』

* 本稿は、『東洋文化研究所紀要』第131冊に掲載した「アウヴァイヤール作『アーッティ・スーディ』——ヴェーンカタサーミ・ナータール註の和訳と解説——（一）」に続くものであり、当該作品の後半部分の翻訳と解説を掲げてある。

この作品は、1994年度の名古屋大学大学院文学研究科博士課程の「インド哲学特殊研究」（タミル文献研究）の演習で取り上げたものである。受講生の皆さんに感謝したい。本研究で用いなかった U. Vē. Cāminātaiyar の註釈については、近日中の発表を期したい。また、本稿（一、二）の作成に当たっては、マドラス大学タミル語科助教授 M. Ponnuswamy 氏を煩わし、訳稿の点検などを賜った。謝意を表する次第である。

(I would like to express my sincere gratitude to Dr. M. Ponnuswamy, Reader in the Department of Tamil Language, the University of Madras, who kindly went through the draft of this study and gave useful advices and suggestions.)